

川の通信簿調査方法の検討について

Considerations of river appraisal report survey methods

水辺・まちづくりグループ 研究員 永島 昇
 水辺・まちづくりグループ 研究員 阿部 充
 河川・海岸グループ グループ長 柏木 才助
 リバーフロント研究所 主席研究員 中平 善伸
 河川・海岸グループ 研究員 小熊 一正

1. はじめに

本研究は、平成21年度に実施された全国の川の通信簿について、過去の調査結果と合わせて分析するとともに、自治体や市民と連携した調査の実施方法、利用者の満足度の高い施設の整備、施設の維持管理に活用できる調査方法等の検討を行ったものである。

2. 平成21年度及び過去の調査結果の取りまとめ

「川の通信簿」は、全国の河川空間の親しみやすさや快適性などを現地において、市民と共同でアンケート調査を実施した結果から、良い点・悪い点を把握し、河川整備計画や日常の維持管理等に反映することにより、良好な河川空間の保全、整備、管理に資することを目的に実施されている。平成15、18、21年度と3年毎に行われ、始まってから3回を数える。

平成21年度の点検箇所数は665箇所、参加者は延べ14,339人であった。評価は5つ星評価が5箇所、4つ星評価が327箇所、3つ星評価が325箇所、2つ星評価が8箇所、1つ星評価が0箇所、点検箇所の多くは3つ星または4つ星となる結果となった。過年度と比較すると、3つ星が減り、4つ星・5つ星が増えている傾向が見られた。

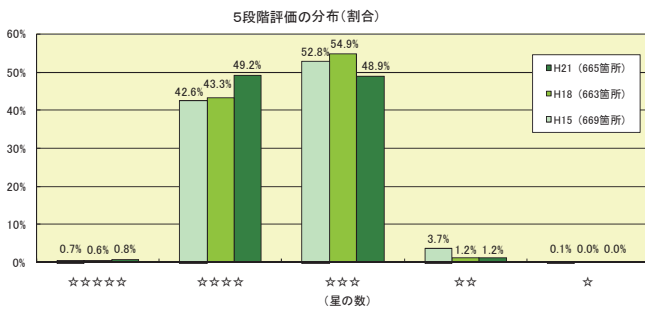


図-1 総合評価結果(過年度との比較)

3. 川の通信簿に求められる今日的役割

3-1 川の評価の現状における問題点

川の通信簿も含めて、河川管理者による河川空間の評価・点検の仕組みはいくつかあるが、それらを整理し、現状における問題点を表-1に整理した。

表-1 川の評価の現状における問題点

現状における問題点	説明
①評価・点検の実施及びその結果が広く周知されていない。	市民の認知度、関心は低く、一般市民を公募しても参加者が少ない。参加者が固定している。 良い評価結果が、観光等に結びつくという循環が構築されていない。
②適正な評価がなされていない。	評価・点検の基準等が、必ずしも明確でない(定量的でない)。 公表結果が箇所毎の平均値になってしまうために、点検箇所の良い部分が見えにくくなる。他の箇所との違いが見えにくくなる。
③評価・点検結果が十分に活用されていない。	評価・点検結果を、その後の整備計画や維持管理における改善に結びつけるフォローアップの仕組み(PDCAサイクル)が明確になっていない。 評価・点検結果の評価者等へのフィードバックや「見える化」が十分に行われていない。 良い評価結果が、観光等に結びつくという循環が構築されていない。
④それぞれの評価の仕組みがうまく連携していない。	評価・点検結果が相互に活用される仕組みにはなっていない。 関係者が連携する場、評価・意見を調整する場がない。 河川管理者自身が、利用者から見た川の良さ・悪さという視点を必ずしも共有できていない。 河川管理におけるちょっとした工夫などの情報が集積できていない。

3-2 川の通信簿の見直しの方向性

既存の川の評価・点検システムに関する現状と問題点を踏まえ、これからの川の通信簿のあり方、見直しの方向性を、表-2のとおり整理した。

表-2 川の通信簿の見直しの方向性

見直しの方向性	主な考え方
①アクティビティ(活動)に応じた評価項目の整理	同じ場所でも、アクティビティ(活動)によって、評価が異なるはずである。よって、活動毎に評価項目を設定することが重要である。
②定量的な評価基準の設定	評価の中で、満足度以外の事象(例えば、水のきれいさ、ゴミの多さ、風景など)については、なるべく客観的な基準を示し、評価してもらうことが重要である。
③WEBによる評価・公表システムの導入	WEBによる評価システムを導入することにより、参加者がいつでもどこでも評価することが可能になり、評価に参加する対象がより大きく拡大することが期待できる。 公表については、GISなど地図情報を用いて全国のどの川の情報でも表示できる公表システムにすることで、「川の通信簿」の魅力が大きくなると考えられる。

4. 今後の川の通信簿の概略検討

4-1 アクティビティに対応した評価項目

河川空間において想定される「アクティビティ」について分類を行った。河川水辺の国勢調査マニュアル(案)(空間利用実態調査編)における32の具体的活動の項目を参考に、「水泳・水遊び」、「ボート・カヌー」、「釣り」、「生物観察」、「バードウォッチング」、「スポーツ」、「キャンプ」、「散策・たたずみ」、「ジョギング」、「サイクリング」、「イベント」、「その他」の12のアクティビティに分類した。さらに、それらのアクティビティごとに、評価項目を設定した。参考例として、「水泳・水遊び」の評価項目の設定について図-2に示す。

①「水泳・水遊び」の求められる要素の整理		
活動の前提条件 (活動を実施する場所や施設がある)	<ul style="list-style-type: none"> 水の中で遊べる場所がある 水の中で遊べる水量がある 水の中に入れる水質である 	
利便性	<ul style="list-style-type: none"> 着替えができる 木陰やベンチなどで休むことが出来る 水飲み場やトイレが整っている 利用情報が整っている 駐車場が整っている 	
快適性	<ul style="list-style-type: none"> 水がきれい(油やゴミが浮いていない) 不快なおいがしない 生き物が見られる 他の活動に邪魔されない 施設の管理が行きとどいている 	
安全性	<ul style="list-style-type: none"> 河川に安全に近づける 水辺に安全に近づける 水際や水中に危険な場所がない 防犯上安心である すぐに避難出来る 	

②「水泳・水遊び」の評価項目の設定		
評価項目	評価基準	備考(今後の検討事項)
水のきれいさ	にごり、ゴミがなく水はきれいか	5段階評価の基準となるにごり等の指標の検討
水量の豊かさ	水泳、水遊びに十分な量があるか	
安全性	深み、急な流れはないか 水辺や水の中に危険なゴミがないか	専門家から安全性の指標について意見を聴取
施設充実度	着替えや駐車スペースはあるか	

図-2 「水泳・水遊び」の評価項目の設定

4-2 定量的な評価基準の設定

評価項目によっては、参考となる基準を提示し評価の精度を保つことが必要である。

例えば、「水質」や「ゴミ」の項目の評価は全国のどこの場所でも同じ状態であれば、同じ評価となることが求められる。図-3に、既存のゴミの指標となる例を示す。

但し、指標として確立されていない評価項目もあるため、今後各分野の専門家等の意見も踏まえ検討する必要がある。

4-3 WEBによる評価・公表システム

WEBによる評価システムを導入することにより、

いつでも、どこでも評価することが可能になり、「川の通信簿」に参加する対象がより大きく拡大することが期待できる。また、近年、商品やホテルなど、個人がレビューや評価を投稿するWEBサイトが数多くあるため、これらを参考にしながら、今後多くの人々に利用される評価・公表システムを構築する事が有効と考えられる。図-4に、「散歩・たたずみ」を例として、評価画面のイメージを示す。

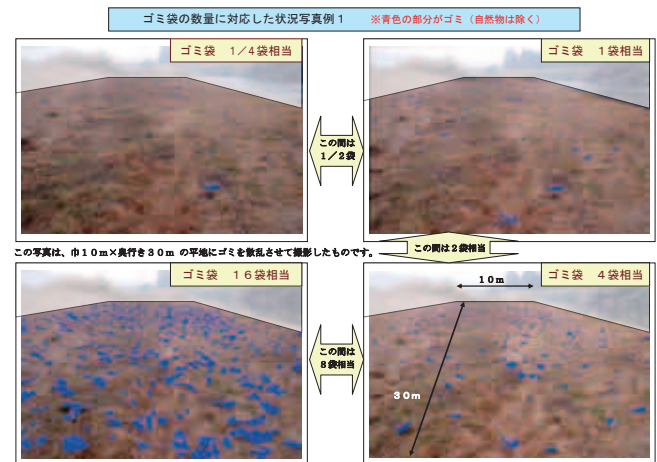


図-3 写真によるゴミ袋の数量の判定(「水辺の散乱ゴミの指標評価手法」より抜粋)

評価項目	評価点数					無評価	評価基準	ものさし(評価基準)
	悪い	★	★★	★★★	★★★★			
歩きやすさ	○	○	○	○	●	○	散策路があるか、車・自転車とは分離しているか	なし
休める場所	○	○	○	●	○	○	日陰となる場所があるか トイレがあるか	なし
アクセス	○	○	●	○	○	○	堤防上や河川敷へのアクセスは容易か	なし
風景、自然環境	○	○	○	●	○	○	風景が美しいか、豊かな自然を感じるか	あり
ゴミ	○	○	●	○	○	○	ゴミはないか	あり
満足度	○	○	○	●	○	-	全体的な満足度	-

図-4 「散歩・たたずみ」の評価画面イメージ

5. おわりに

本研究では、「川の通信簿」の結果を実際に活用できるようにするための視点及び留意点について検討を行った。今後は、実際の調査の実施に向け、評価方法について更に詳細に検討することが必要である。

<参考文献>

- (財)リバーフロント整備センター：平成5年度版 河川水辺の国勢調査マニュアル(案)(河川空間利用実態調査編)(1993)
- 国土交通省東北地方整備局・JEAN/クリーンアップ全国事務局及び特定非営利活動法人パートナーシップオフィス：水辺の散乱ゴミの指標評価手法(2004)